

ドラマの中の高校生と現実の高校生

2004年9月7日 松野聖史

【要旨】

学校祭が終わって、テレビをつけると、物語も佳境に入った「ウォーターボーイズ2」が放映されていた。ドラマの中の高校生と、現実の高校生のギャップが大きすぎるのを実感し、その原因を探ってみた。

【キーワード】

学校祭 高校生 ウォーターボーイズ2 ドラマ 青春

昨年、今年と、夏のフジテレビ系のドラマに「ウォーターボーイズ」がある。もともとは、映画が原作で男のシンクロというものをテーマにした高校生たちの熱い青春を描いたものだ。竹中直人氏が出演していたので見てしまったのが始まり。要は、ハマッタ……。その後、去年は、同じ高校の後輩たちの物語で、今年、初代のシンクロチームにいた生徒が教師をしている学校という設定で始まった。

「ウォーターボーイズ」シリーズは、とにかく、熱い。高校生たちの懸命な努力が目頭を熱くする。今回は、シンクロ公演が、諸所の事情でできなくなって、それでも、練習を続け、他の学校に公演場所を探しに行くという主ストーリーを軸に、コーチとの人間関係や、なかなか集まらない高校生同士の間関係、大人との考えの違い、「青春」とは何だ! というものを存分に語っているメッセージドラマになっていると思う。

さて、ドラマの中の高校生たちは、とにかく一生懸命だ。悩み、傷つき、仲間を集めるのも並大抵のことではなかった。一番、脚本家が言いたいのは、「あきらめないこと」であろう。彼らは、次々にこんなに難題がくるわけないだろうと思うほどの困難がやってきても、友情で、個人の気持ちの整理で、みんなと一緒に乗り越えてゆく様を描いている。「あきらめない」ことで、道は開かれていく。また、自分たちで目標をしっかりと持っている。前に、「団結することの意味」という僕のエッセイ内で強調しているのだが、「たった一つの目的のためにだけ団結する」集団なのである。はじめは遊び感覚ではじめたシンクロであるが次第に、公演したいという強い共通の目標ができ、彼らは、強い絆で結ばれていくのだ。どんな困難があっても、「いつかみんなで成功させたい」というたった一つの目標を信じて疑わないからこそ、生徒会に立ち向かっていけるし、大人たちに忘れていた少年の頃の熱い気持ちを伝え、心を動かしていくのだと思う。今回、全校生徒に「公演させてくれ」というアピールを集会のときにいきなり前に出てメンバーたちがするところで終わったのだが、この後はどうなるかというよりも、彼らがそういう行動ができるということに非常に感銘を受けた。

また、このドラマの中で大きく僕が関心を抱いたのは、生徒会の存在の大きさである。学校のことは、教員よりも生徒会長がすべて仕切っているというようなドラマ内での扱いだ。他の高校を訪問した主人公たちが、アポイントを取る段階で「生徒会」にアポイントをとってからその学校で、執行部の面々に話をしているシーンがある。先週まで公演が決まっていた学校にも、生徒会がどんな競技かを審査するシーンがあった。

現実はどうなのか。まず、学校のことは、教員が決めている。僕が高校のときは、まさにドラマのように、学校のことは自分たち生徒会（もしくは、各実行委員）が動かしていると自負と責任を持った行動をしていた……。と思うが、現場は、生徒は教員の操り人形に過ぎない。というか、生

徒自身に自分たちが学校を動かしているという自覚がないような感じを受けるし、何より、自分たちでアイデアひとつ出せないか、アイデアではなく、モノマネ程度（いわゆるパクリ）しかできないので、オリジナリティーなどほとんどないのだ。教員が学校を動かしていかないと回っていかないというのがほんとのところであろう。

どうも、「できることなら関わりたくない」とか、「めんどくさい」「誰かがやってくれるだろう」、「好きな奴が勝手にやればよい」といった言葉を口にしてのを何度も目にしているので、最近の高校生はそういう考えのようだ。生徒会選挙では、教員が比較的その役職にふさわしそうな生徒に放課後個別にお願いして、いやいやながら（たまには好意的に？）半ば強引に立候補させる。立候補してくれた生徒に悪いからか、対立候補を出すことはなく、いつも信任投票だ。今はお願いというよりも、「声をかけてもらったことはとても光栄なことなんだ！」というオダテ(?)文句を並べて、本人をその気にさせて、立候補させるというような手順が一般的だ。・・・情けない。

僕が高校のときは、月とスッポンだ。自分で動かしてやろうとか、ぜひ、執行部になって変えてみたいことがあるというような野心がないのだろうか。それとも、自分ひとりではなんともならないというあきらめが勝っているのだろうか。とにかく、動かない。動けない。

先日、新幹線に乗って熱海の温泉に行ってきた。新幹線の胴体に、Ambitious とあった。どこかで聞いたなあと思ったら、「少年よ大志を抱け」のクラーク博士の名言である。新幹線は、世界一の技術を誇りつつもさらに“野心”を持つようとしているようだ。なんと、すばらしい前向きな考えだろう。向上心というものを感じる。特に、のぞみの大量増便は、思い切った改革だったと個人的に評価したい。

さて、高校生に戻ろう。彼らには、Ambitious がないのだろうか。まったく、嘆かわしい。それでいて、誰かが方向性を決めると、文句や愚痴ばかりを言う。で、代案を出したり代わりに何かをしてくれるのかというと、それもない。一生懸命仲間同士で何かをしようという考えがまったくないのだろうか。どちらかといえば、自分さえ楽であればよいというような考えが強いと思われる。好き好んで苦勞などしない。「苦勞は買ってでもせよ」という、先人の知恵も全く若者には聞き入れられていないようだ。

こうした考え方は、勉強にも見える。いかに楽をするか。すぐ、自分にできないとあきらめてしまう。テストで点がとれないと、先生や、教科書や問題集が悪いという。

ドラマの中のような高校生は、どのようにしたら生まれてくるのだろうか。日本の未来を動かしていける人材を作るにはどうしたらよいだろうか。この問題は、学校や、教育関係者、親、・・・。誰もが考えなくてはならない大問題であると思う。青春時代に“青春”できない高校生たちを見て、毎年やるせない気持ちになるのは僕だけではないだろう・・・。